

平成 30 年度環境カウンセラー研修(北海道地区)

企画・運営業務報告書

平成 30 年 12 月

特定非営利活動法人 環境カウンセラー全国連合会

< 目 次 >

1.研修の概要	・・・ P1
2.平成 30 年度環境カウンセラー研修(北海道地区)スケジュール	・・・ P2
開会挨拶	
3.研修の記録【全体研修】	・・・ P3
1)「SDGsの視点を踏まえた持続可能な地域づくり」	
～地域循環共生圏の構築に向けて～	
2)「ESD の視点を取り入れたファシリテーション技術の向上について」	
～参加・体験型環境教育・学習、意思決定の場での課題解決サポート～	
4.研修の記録【専門研修】	
環境カウンセラー活動の事例発表	・・・ P13
(1)NPO法人としての循環型社会の構築に向けた活動	
(2)自然再生を地域のネットワークで実践する活動	
分科会	・・・P 19
分野① 「低炭素化社会の構築に向けて」～北海道の低炭素化とは～	
分野② 「自然共生社会とは」～北海道における自然との共生～	
5.アンケート	・・・ P26
1)アンケート用紙	
2)アンケート集計結果	
3)自由記載アンケート結果のまとめ	

1. 研修の概要

1) 目的

環境カウンセラー登録制度実施規程（平成8年環境庁告示第54号）第10条第1項により、環境大臣は環境カウンセラーの資質、能力等の向上を図るため、毎年、全国二か所以上で研修を行うことになっている。

このため、「平成30年度環境カウンセラー研修実施要領」に基づき、平成30年度環境カウンセラー研修（北海道地区）（以下、本研修という。）の企画・運營業務を行った。

新規登録者には、①環境カウンセラーとしての資質、能力の向上を図る。②環境カウンセラー制度についての理解を深め、活動を円滑に開始するための手法等を修得させる。③情報交換による環境カウンセラー間のパートナーシップを形成することを目的とし、既登録者には、①環境カウンセラーとしての資質、能力の向上を図る。②情報交換による環境カウンセラー間のパートナーシップを形成することを目的として、本研修を行った。

2) 主催

特定非営利活動法人環境カウンセラー全国連合会

3) 開催日時、場所、定員

開催日時：平成30年11月17日（土） 募集定員：50名

開催場所：環境プラザ 環境研修室1・2

（札幌市北8条西3丁目札幌エルプラザ2階）

全体研修 環境研修室1・2

専門研修 環境研修室1及び2

4) 本研修プログラム策定

本研修のプログラム策定にあたっては、本研修の企画・運營業務仕様書を基に、平成29年度の研修時アンケート結果及び反省会での確認事項等を検討考慮して、専門研修は全体研修に準じた2分野「低炭素化社会、自然との共生」をP3の本研修のスケジュールの通り開催することにした。

5) 受講者数

研修応募者数：21名 研修受講者数：20名

全体研修受講者数：39名 専門研修参加者数：24名

2.平成 30 年度環境カウンセラー研修(北海道地区)スケジュール

開催日時 : 11 月 17 日(土)10:00~16:45 受付:9:30~

場 所 : 札幌市環境プラザ 環境研修室 1、2 札幌市北区北 8 西 3 札幌エルプラザ 2 F TEL:011-728-1667

定 員 : 最大50名

午 前 の 部	9:45~10:00 (15分)	オリエンテーション	
	10:00~10:10 (10分)	開会挨拶 環境省北海道地方環境事務所環境対策課 岡本 裕行 課長	
	10:10~11:10 (60分)	全体研修1 (一般公開) 「SDGsの視点を踏まえた持続可能な地域づくり」 サブテーマ: (地域循環共生圏の構築に向けて) 講師: RCE北海道道央圏協議会」事務局長 有坂 美紀 様	
	11:10~12:00 (50分)	全体研修2 (一般公開) 「ESDの視点を取り入れたファシリテーション技術の向上について」 サブテーマ: (参加・体験型環境教育・学習、意思決定の場での課題解決サポート) 講師: 環境省北海道環境パートナーシップオフィス チーフ 溝淵 清彦 様	
	12:00~13:00 (60分)	昼食・休憩	
午 後 の 部	13:00~13:30 (13:00~13:15) (13:15~13:30) (30分)	専門研修「環境カウンセラー活動の事例発表」 発表者 ・石塚 祐江(環境カウンセラー、NPO法人環境リ・ふれんず代表理事) テーマ: 「NPO法人としての循環型社会の構築に向けた活動」 ・坂元 直人(環境カウンセラー、株式会社エコテック専務取締役) テーマ: 「自然再生を地域のネットワークで実践する活動(仮題)」	
		専門研修 第1分科会(環境研修室1)	専門研修 第2分科会(環境研修室2)
	13:30~16:00 (90分)	「低炭素化社会の構築に向けて」 ~北海道の低炭素化とは~ ファシリテーター: 環境カウンセラー1 (石塚発表者参加)	「自然共生社会とは」 ~北海道における自然との共生~ ファシリテーター: 環境カウンセラー2 (坂元発表者参加)
		コーディネーター: 溝淵 清彦 様	
	16:00~16:10 (10分)	休 憩	
	16:10~16:40 (30分)	ファシリテーターから分科会単位の発表 (質問含む)	
16:40~16:45 (5分)	閉会式 修了証授与(アンケート記入) 閉講挨拶 NPO法人環境カウンセラー全国連合会常務理事 吉迫 勝意		

※ 環境カウンセラーの方は、午前・午後の部の一つでも受講されない場合は、修了要件は、満たしませんので御注意下さい。

開会挨拶

環境省北海道地方環境事務所 環境対策課 課長 岡本 裕行 氏

本日の研修会は、一般市民の方、環境カウンセラーの方々を対象として開催しており、さらに、環境カウンセラーの方々を環境省が応援するという目的で実施しています。

去る11月11日に、全国の高校生の環境に関する活動を発表する北海道地区の大会がありました。私もその発表会に参加して来ましたが、全道から23もの団体の発表があり、その活動内容が多岐にわたるもので、私も大変感動いたしました。

その発表の中の一つに、「北方圏のトンボ」、「南方圏のトンボ」について広く調査し、発表した事例がありました。また、別の高校生は、「省エネルギー」について発表した例があり、例えば、「昼休み時間の消灯」、「トイレトペーパーの使用節約」などを実行したところ、その学校全体で年間100万円も削減することができた、という発表でした。

本日、ここに参加されている皆様には、こうした高校生の環境保全に向けた取り組みにならって、環境に関心を持った当時の情熱と積極的な行動力を持って、環境保全に取り組んでいただきたいと思います。

本日、参加された皆様にとって、この研修会が実り多いものとなることを祈念して、挨拶とさせていただきます。本日は、ご参加ありがとうございます。

[北海道地方環境事務所環境対策課 課長 岡本裕行氏のご挨拶の写真]



[開会前 岡本裕行課長、有坂美紀講師、司会の江本理事]



[会場の全体風景]



3.研修の記録【全体研修1】

<p>テーマ</p>	<p>「SDGsの視点を踏まえた持続可能な地域づくり」 サブテーマ:地域循環共生圏の構築に向けて</p> <p style="text-align: right;">参加者:39名</p>
<p>講師</p>	<p>RCE 北海道道央圏協議会 事務局長 有坂 美紀氏</p>
<p>【SDGsの経緯・目的】</p> <p>世界人口は、70億人を突破し、2050年には98億人に達すると予測されている。人間活動に伴う地球環境への負荷はますます増大し、人類の生存基盤である地球環境は存続の危機に瀕している。こうした危機感を背景に、2015年9月の国連総会において「持続可能な開発のための2030アジェンダ」が採択された。2030アジェンダは、先進国と開発途上国が共に取り組むべき国際社会全体の普遍的な目標として採択され、その中に「持続可能な開発目標（SDGs）」として17のゴールと169のターゲットが設定されている。</p> <p>【持続可能なキーワード(5つのP)】</p> <p>持続可能な開発目標の中の5つのPに着目している。この5つのPとは、「人間:People」、「地球:Planet」、「繁栄:Prosperity」、「平和:Peace」、「パートナーシップ:Partnership」である。「SDGs」の理念は「誰一人取り残さない」ということであり、SDGsの主要原則は「権利・人権」である。</p> <p>「SDGs」で注意をすべき課題は、「トレードオフ」ということで、各目標、各ターゲット間にはトレードオフ（二律背反）の関係があるものがある。</p> <p>【注目されるSDGsの経済効果】</p> <p>SDGsへの対応による新たな成長により、「1365兆4800億円」もの利益を生むという試算が公表されている。</p> <p>これを受けて、現在、英国では企業の約70%が事業戦略にSDGsを統合している。企業も、行政もSDGsに積極的に取り組むようになっており、やる気が出てきている。企業だけでなく、行政や市民活動も、きちんとSDGsを捉えておかないと[SDGs ウォッシュ(見せかけ)]を引き起こすことが懸念されている。その結果として、社会からの信用を失うことになる。</p> <p>【道内企業のCSRに対する活動や認識に関するアンケート調査の結果】</p> <p>北海道大学環境科学院とRCE北海道道央圏協議会では、共同で標記に関するアンケート調査を実施した。調査の対象とした企業数は1432件であり、このうち回答を寄せてくれた企業は156件であった。</p>	

アンケート調査の主な結果は次の通りであった。

- 道内企業156事業所の13%が、SDGsを知っていた。さらに、名前くらいは知っている事業所は、70%であった。
- 自社の事業活動との関連性を尋ねたところ、関連性を判断できなかった企業が多かった。
- SDGsの17のゴールの認識を尋ねたところ、自己認識が低い企業が大半だった。
- CSR21項目からSDGsの17の目標に読み替えると、間接的まで含めると「関係している」と回答した企業が大半だった。
- SDGsの実施状況について聞いたところ、「実施している項目がある」と回答した企業は、約80%であった。
- SDGsの実施状況で項目別に聞いたところ、「人権・公平に関連する目標」での実施状況が低いことが分かった。
- 企業理念とCSR方針の明文化について聞いたところ、「SDGsの説明責任：つくる責任・つかう責任」との意識が、まだまだ低かった。

【我々の世界を変える行動の呼びかけ(結語)】

講演の最後に、持続可能な開発のための2030アジェンダから「我々の世界を変える行動の呼びかけ」という結語を紹介していただいた。(以下に紹介する。)

1. 人類と地球の未来は、われわれの手の中にある。

そしてまた、それは未来の世代にたいまつを受け渡す

今日の若い世代の手の中にもある。

2. 持続可能な開発への道を我々は記した。

その道のりが成功し、

その収穫が後戻りしないことを確かなものにすることは、

我々のすべてのためになるのである。

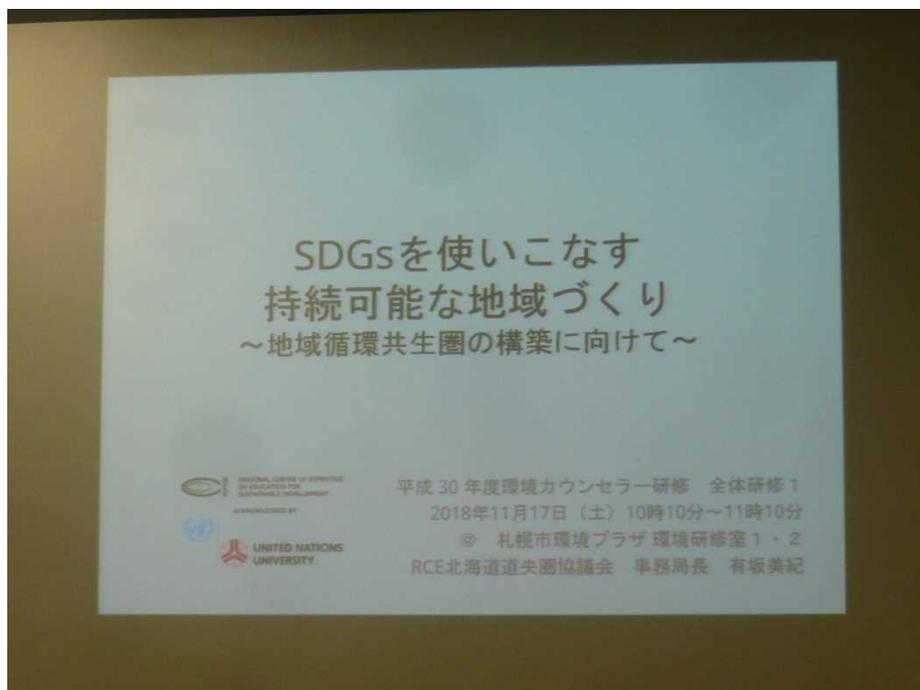
3. 地球温暖化対策について地方公共団体等との連携構築について。

あなたは、どのような対応をしたら良いでしょうか。

[講師の有坂美紀氏]



[講演会で用いた最初のスライド、有坂美紀氏作成]



[講演会の会場の風景]



[講演会の会場の風景]



3.研修の記録【全体研修2】

ESDの視点を取り入れたファシリテーション技術の向上について

サブテーマ：参加・体験型環境教育・学習、意思決定の場での課題解決サポート

参加者：39名

環境省北海道環境パートナーシップオフィス

チーフ 溝渕 清彦 氏

【研修の目的】

ESDの視点を取り入れたファシリテーションの意味、内容について学習し、それを活用する訓練を行うことにより、ファシリテーション技術の向上を目標とする。

また、今後、環境カウンセラー活動を実践する場合、多様な参加者の意見を引き出し、まとめ、情報提供できる能力を身に付けることを目標とする。

【ESDとSDGsの関連性について】

「ESD（持続可能な開発のための教育）」と「SDGs（持続可能な開発目標）」の関係について説明があった。また、ファシリテーションの意味、定義について説明があった。

ファシリテーションとは、会議やチーム活動における、成果が最大となるよう、中立的な立場でプロセスに関与し、活性化を促進すること、である旨の説明があった。

そのほか、組織における成功の循環モデルが紹介された。組織における成功の循環モデルとは、関係の質→思考の質→行動の質→結果の質、のことを言う。

【ファシリテーションのポイント1】

ファシリテーションのポイント1は「傾聴する」ことである。

傾聴するということは、「考える」を受け止めることである。

ほどよく視線を合わせて「うなずき」「あいづち」「復唱」「要約」で応えることである。

疑念や自分の意見にとらわれず、相手の発言を真摯に受け止める。

【ファシリテーションのポイント2】

ファシリテーションのポイント2は「質問する」ことである。

質問するということは、「考える」を後押しすることである。

問いただすのではなく、ともに考える。相手の話題に関心を持って質問する。

「聞いた質問」「閉じた質問」を使い分ける。「沈黙」をおそれない。

普段から「質問づくり」に取り組む。

【ファシリテーションのポイント3】

ファシリテーションのポイント3は「可視化する」ことである。

可視化するということは、記録して、つないで、整理することである。

文字の美しさや正確さは後回し
 少し大きな文字で、一呼吸ゆっくりと
 聞き取れなければ、仲間に確認する
 情報や意見をつないで、新しいアイデアが生まれることを促す

講演の最後に、参考文献を紹介していただき、講演を終了されました。また、別紙で「意見交換を観察する視点」という観察する場合のポイントを配布していただきました以下に、紹介します。

番号	観察のポイント		観察すること(例)	
1	観察	視線の高さ	<input type="checkbox"/>	一人ひとりと目を合わせる
		表情やしぐさへの注目	<input type="checkbox"/>	表情やしぐさを見て反応する
		視野の広さ	<input type="checkbox"/>	個人とともにメンバー全体を見る
2	傾聴	中立的な受け止め方	<input type="checkbox"/>	決めつけず、中立的に受け止める
		うなずきやあいづち	<input type="checkbox"/>	目を合わせ、うなずき、あいづちを打つ
		反復・言い換え・要約	<input type="checkbox"/>	本当に言いたいことなどを探る
3	質問	質問の活用	<input type="checkbox"/>	主張や説得ではなく、質問を用いる
		開いた質問・閉じた質問	<input type="checkbox"/>	詰問にならないよう質問形式を使い分ける
		決定事項の確認	<input type="checkbox"/>	段階ごとに確認をとり、明確に進行する
4	可視化	丁寧に板書する	<input type="checkbox"/>	ゆっくり一息おいて板書する
		意見を配置する	<input type="checkbox"/>	意見交換に適したレイアウトパターンを選ぶ
		情報を整理・確認する	<input type="checkbox"/>	意見の比較やアイデアの連結を行う
5	チーム活動のプロセスへの関与	マナーやルールの保持	<input type="checkbox"/>	必要に応じて介入し、ルールを守るよう促す
		関わりの促進	<input type="checkbox"/>	メンバー間の意見交換を促す
		タイムマネジメント	<input type="checkbox"/>	進捗を共有しながら時間を管理する

【研修の方法及び結果】

参加者が4～5のグループに分かれ、グループごとに自己紹介、意見交換を行った。

その場合の課題は、次の通りだった。

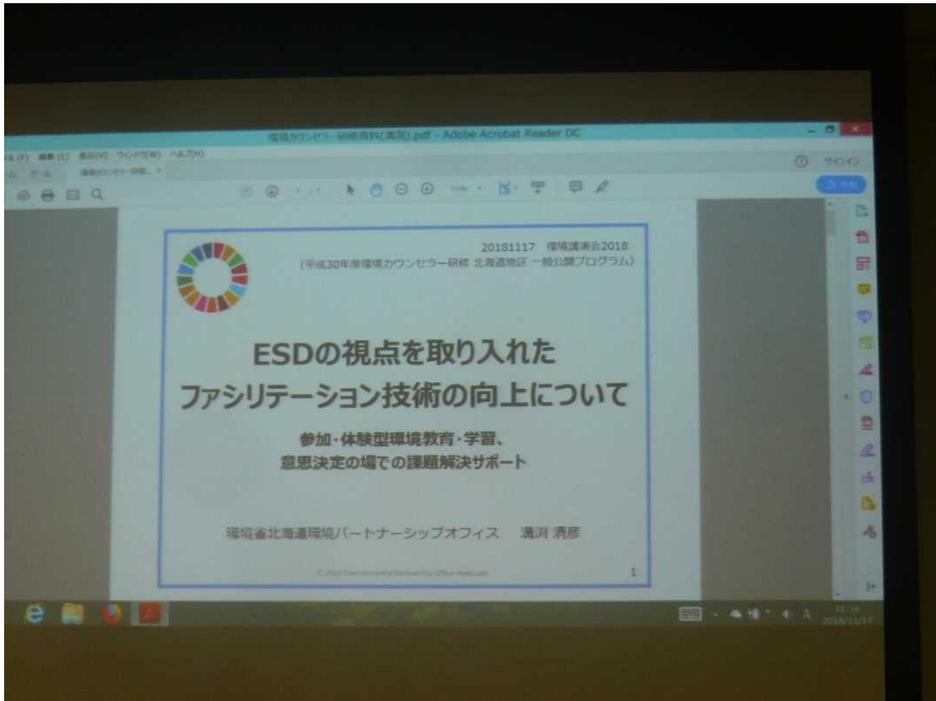
- (1) 意見交換、チーム活動、協働を促進する機能は、皆さんの活動において必要ですか？
- (2) それは、どのような場面においてですか？
- (3) 意見交換を設計するという考え方は、どういうことですか？
- (4) あなたは、何について話し合いたいですか？
- (5) そのテーマについて、どのような意見が出てくると嬉しいですか？
- (6) そのためには、どのような「問い」が必要だと思いますか？

こうした討議テーマについて、グループ内で議論し、認識を共有した。このようなファシリテーション技術は、今後の環境カウンセラーの活動にとって重要な資質能力を向上させるものであり、大変意義のある研修会となったと感じた。

[講師の溝淵清彦氏]



[講演会で用いた最初のスライド、溝渕清彦氏作成]



[講演会の会場の風景]



4. 研修の記録 専門研修 環境カウンセラー活動の事例発表（1）

テーマ	NPO法人としての循環型社会の構築に向けた活動
講師	環境カウンセラー、 NPO法人 環境り・ふれんず代表理事 石塚 祐江 氏
<p>【講師の自己紹介】</p> <p>最初に講師の石塚祐江さんご自身による自己紹介があり、それによるとおおむね次の8つの要職を歴任されていた。</p> <ol style="list-style-type: none"> ① リサイクルプラザ宮の沢の管理運営：指定管理者 ② ECOカフェマイカップの運営 ③ さっぽろファイバーリサイクルネットワーク ④ 北海道容器包装の簡素化を進める連絡会 ⑤ NPO法人北のごみ総合研究所事務委託 ⑥ 桑園交流ネットワーク：地域支援事業担当 ⑦ 桑園第6町内会事務局：会計担当 ⑧ 3R&低炭素社会検定北海道地域パートナー <p>【循環型社会の構築に向けた活動のポイント】</p> <p>循環型社会の構築に向けた活動のポイントとして、次の7項目を実践している。</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 気づいて、築く持続可能な社会 ② 暮らしを見直すごみニュケーション ③ 「地域」循環型社会 ④ 地産地消・地参地笑 ⑤ 1人の100歩より、100人の1歩 ⑥ まちづくり（子育てから会議まで） ⑦ 環境教育（人材育成） <p>【地域と連携するための配慮事項】</p> <p>地域と連携するために、講師は次のことを心がけているとのこと。</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 暮らしとつなげる活動をする。 ② やりたいことを形にしていく。 ③ 焦らず、楽しく、みんなで取り組む。 <p>このように考えて、目的と行動はシンプルに行うことで、簡単で楽しくなる。</p>	

【環境活動の拠点づくりの例】

講師は、環境活動の拠点づくりとして、次のような活動を実践している。

- 札幌市リサイクルプラザの管理・運営を受託（2003年4月～現在）
- E C Oカフェマイカップを自主運営（2009年8月～現在）
- E C Oカフェマイカップは、エコな暮らしをK I Z U K U環境活動の拠点
- ファイバーリサイクル活動・拠点回収&バザー
- 容器包装の簡素化活動

【容器包装の簡素化の取組み】

- 北海道容器包装の簡素化を進める連絡会は、2008年洞爺湖サミットがきっかけ
- レジ袋を製造するのに1枚当たり、石油 20ml が必要
- 我が国で1年間に使用されているレジ袋は300億枚なので、石油 60万klになる
- 市民・流通事業者・行政が連携して取組み、レジ袋の無料配布中止運動へ
- 現在、レジ袋の次のターゲットとして容器包装の簡素化活動に取組み中である
- 味の素ゼネラルフーズ株式会社では、中身を濃縮することで容器包装を小さく軽く
- 容器包装簡素化大賞という表彰制度を発案、現在募集中
- 容器包装簡素化の勉強会を企画・運営し、適宜開催

【容器包装の簡素化運動の啓蒙活動の取組み】

容器包装の簡素化運動を普及させるために、以下の啓蒙普及活動を展開している。

- リーフレット「容器包装をみなおそう」1冊500円で販売中（本日50冊限定販売）
- E C Oカレンダー・高月紘先生のE C Oカレンダーを、1部900円で販売中

[講師の石塚祐江氏の講演風景]



[会場の全体風景]



[会場の全体風景]



4.研修の記録 専門研修 環境カウンセラー活動の事例発表（2）

テーマ	自然再生を地域のネットワークで実践する活動
講師	環境カウンセラー、株式会社エコテック専務取締役 坂元 直人 氏
<p>【自然再生の経緯・目的】</p> <p>自然再生、自然環境の保全は、持続可能な開発目標（SDGs）の17の目標「11. 住み続けられるまちづくりを」、「13. 気候変動に具体的な対策を」、「15. 陸の豊かさを守ろう」などに合致する重要なものである。</p> <p>さらに、我が国では「生物多様性国家戦略 2012-2020」では、自然共生社会実現のための基本的な考え方として「自然のしくみを基礎とする真に豊かな社会をつくる」が公表されている。また、本国家戦略の5つの基本戦略（2020年度までの重点施策）として、次の施策が規定されている。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 生物多様性を社会に浸透させる 2. 地域における人と自然の関係を見直し、再構築する 3. 森・里・川・海のつながりを確保する 4. 地球規模の視野を持って行動する 5. 科学的基礎を強化し、政策に結びつける <p>【生態系サービスと自然共生圏】</p> <p>生物多様性とは、「生態系の多様性」、「種の多様性」、「遺伝子の多様性」の3種類から構成されている。また、生態系サービスには、「供給サービス」、「調整サービス」、「生息・生育地サービス」、「文化的サービス」の4種類から構成されている。</p> <p>環境省では、当初、都市と農村地域の中間的な位置に存在する地域として「自然共生圏」と呼称していたが、その後、2016年9月に「森・里・川・海をつなぎ、支えていくために（提言）」を公表し、その中で「地域循環共生圏」を位置づけている。</p> <p>【絶滅のおそれのある野生生物種の保全戦略(平成26年4月)】</p> <p>当該戦略では、生息・生育地内、生息・生育地外各々に分けて保全施策を提唱している。例えば、生息・生育地内の「生態系に着目した保全施策」として、保護地域における開発規制、自然再生、二次的自然環境の維持管理などを提唱している。</p> <p>【地域の様々な主体をつなぐ活動の例(1)幌向地区自然再生事業の紹介】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 石狩平野に残存する湿原植生は、約30haでかつての0.1%以下になっている。 ○ 夕張川下流部には、かつて幌向原野と呼ばれる「ボグ（高層湿原）」が広がっていた。 ○ 幌向地区では、環境調査によってミズゴケの生息が発見され、その後緊急避難として、種子 	

の保護、ポット苗の育成など保全活動が推進された。

- ミズゴケ及び高層湿原植生の代替移植・再生試験を実施の上、湿原植生群落の再生に向けた維持管理手法の確立を目的として、多様な主体の協働による自然再生事業を推進している。

【地域の様々な主体をつなぐ活動の例(2)当別地区自然再生事業の紹介】

- 当別町では、地元で生育していた「ヒメガマ」を活用して「チタラペ（ゴザ）」編みに挑戦した。
- 当別自然再生地に生育していたガマを活用して、アイヌ民族文化の一つであるゴザ編みを行い、伝統文化を継承するイベント「親子体験会」などを、幌向自然再生事業の一環として開催した。

【地域の様々な主体をつなぐ活動の例(3)月形町札比内地区自然再生事業の紹介】

- 月形町の札比内地区では、地区近辺に生育していた「ヤチヤナギ」を移入し植樹した。
- 参加者からは「これまで悩みの種だった土壌条件の場所が、ヤチヤナギを植えたことでとても愛おしく思えます。」という感想を頂戴している。
- このヤチヤナギを植栽した地区を、「Haruki こどもガーデン」として、ヤチヤナギ 30 株を植樹して、それまで排水不良で作付けを諦めていた耕作放棄地水田を再生した。

【自然再生の将来展望】

活動報告の最後に、講師の坂元直人氏から「自然再生の将来展望」と題して、以下のようなお話がされ、ご講演を終了された。

- 自然再生事業の将来の展望は、河川管理と農地管理の連携による自然再生を目指すべきである。
- 現在、石狩川の流域の個々の地域で実践されている再生事業を、石狩川の流域全体に拡大させ、個々の活動団体の協働・連携・交流を推進していきたい。
- これに関する具体的な動きも出てきている。2018年1月18日に、「しめっちフォーラム 2017」と題する石狩川流域の湿地・水辺・海岸ネットワークの大会が開催された。

[坂元講師の講演風景]



[会場の全体風景]



[坂元講師作成の生態系サービスのイメージ図]



4.専門研修 分科会 分野①

テーマ	低炭素社会の構築に向けて ～北海道の低炭素化とは～
講師	ファシリテーター：環境カウンセラー 小川 祐美 コーディネーター：溝淵 清彦氏（活動事例発表者：石塚 祐江氏参加）
<p>【分科会の目的・進め方】</p> <p>全体研修3の環境カウンセラー2名による「環境カウンセラー活動事例の発表」の後、分科会に分かれて、参加者全員参加のもと二つの分科会に分かれて意見交換が行われた。</p> <p>第1分科会のテーマは、「低炭素社会の構築に向けて」で14名の環境カウンセラーが参加した。</p> <p>第1分科会は2つのグループに分けて意見交換を行った。</p> <p>各グループは、1低炭素化の課題(情報共有)、2低炭素化の取組とその課題、3今後の取組、4ふりかえり(まとめ)の順で、グループワークを実施した。</p> <p>【1低炭素化の課題】</p> <p>□グループ1</p> <p>再生可能エネルギーの普及、ごみ処理に係る大量のエネルギーからの回収、省エネ、環境教育の必要性、CCSの実証、公共交通の課題などの提起があり、まとめは地域循環を進める、廃棄物の有効利用、足元でできることは教育そしてやる気。</p> <p>□グループ2</p> <p>北海道の低炭素化では暖房用エネルギーを削減することが大きな課題で、地場で活用できる太陽光・風力・地熱・バイオマス発電の再生可能エネルギーを推進すること及び循環型社会の推進が必要。</p> <p>【2低炭素化の取組とその課題】</p> <p>□グループ1</p> <p>環境カウンセラーとしては行政への提言を行うことや連携して低炭素化に取り組むことが効果的であるが認知度は低く、また環境マネジメントなどを通じて企業への働きかけは行っても人手不足の中で忙しく参加意識は低い。</p> <p>□グループ2</p> <p>企業の環境マネジメントシステムの構築を支援し、低炭素化(省エネ)に取り組むよう指導しているが、費用対効果が課題で、環境カウンセラーは知識があるのに認知度が低く、個人で活動するより環境教育などはSDGsを用いるなど地域との連携が必要。</p> <p>【3今後の取組】</p> <p>□グループ1</p> <p>行政・企業との連携、特に仕組みを作る人へのアプローチ(教育)が必要で、企業に対してはメリットのある提案を行う一方、行政や事業者に頼らない若い人が無理なく楽しく参加できる市民主体の自立の道を歩む。</p>	

□グループ2

低炭素化を推進するために、環境教育をより一層行うよう学校の授業に取り入れてもらう活動や、市町村の環境基本計画や地球温暖化防止計画の策定メンバーに、環境カウンセラーが加わるなど地域連携に向けて具体的に行動する。

【4 ふりかえり(まとめ)】

□グループ1

北海道の低炭素化を推進するためには、行政や事業者との連携は必要であるが、自立した活動を行うことが肝要であり、環境カウンセラーの認知度を向上させ、事業者に対してはメリットを提案し、低炭素化の活動が習慣化するような環境教育が必要である。

□グループ2

環境と経済が両立するよう法制化が必要である。

[第1分科会会場の全体風景] (第1分科会は二つのグループで実施)



[第1分科会会場の全体風景]



[第1分科会会場の全体風景]



4.専門研修 分科会 分野②

テーマ	自然再生社会とは ～北海道における自然との共生～
講師	ファシリテーター：環境カウンセラー 伊藤 育子 コーディネーター：溝渕 清彦氏（活動事例発表者：坂元 直人氏参加）

第2分科会のテーマは、「自然共生社会とは」でこちらには10名の環境カウンセラーが参加した。以下、本稿では第2分科会の議論、討議、意見交換の内容について記述する。

なお、意見を表明するに当たって、次のような留意すべき事項が発表された。

- ① 自分の意見を表明するときは、必ずポストイットにメモ書きしてから発言すること。
- ② 発表した意見は、その要旨をメモにして、摸造紙に貼ること。
- ③ 摸造紙に貼るときは、参加者全員に見えるように貼ること。

【参加者の自己紹介】

- ・ 自分は帯広市に住んでいる。環境カウンセラーの勉強会、セミナーなどは、札幌市が中心として開催されているので、カウンセラー協会には入会しにくい。
- ・ 自分の希望としては、自宅にタヌキが来るような場所に住みたいというのが本音である。
- ・ 自分は、地域の花木で庭づくりをしたい。それは身近なところで生き物の生息・生育の場を提供したいためである。
- ・ 自分は、大雪山の山守隊を組織し、山岳保全の活動をしている。
- ・ 大雪山は国立公園なので、国が管理・利用を企画・運営しているが、予算の制約などがあり、かなり限定した活動になっている。
- ・ このため、民間の資金やノウハウを提供してもらい、企業協賛のあり方を考えていくべきである。
- ・ 自分が簡単に行くことができない地方の人と交流がしたい。
- ・ ヤチャナギを活用して、地域の人に利益がもたらされるような活動を行いたい。
- ・ 自分は東京都板橋区の白子川・〇〇〇川をきれいにする会の活動をしている。
- ・ 美瑛町の青い池が最近、話題になっているが、そこには外国人観光客が多い。
- ・ 外国人観光客は、日本人以上に情報を持っている。
- ・ 地域の方は、その地域の持っている自然環境等の価値や良さが分からない人が多い。
- ・ 環境教育の取り組みでは、学校の先生方が自然環境の価値や良さを、理解しないまま取り組みをやっている先生が多い。
- ・ 家庭でも、両親は昔自分たちがやっていた遊びや自然の恵みを忘れてしまっている。
- ・ 学校で環境教育に取り組むことは、大変結構だと思うが、それを正當に評価する場や、仕組みがないことが大きな問題である。

- ・ 地球温暖化対策には、適応策と緩和策という二つの方法がある。
- ・ 自然の営み、価値を素直に受け止めることが必要である。自然の中に何を見るかである。
- ・ 旭山動物園の行動展示が話題になっているが、それは果たして良いことなのか。
- ・ 人間は自然の中では、一つの生物に過ぎない。しかし、人間中心の世界となっていて、人間しか見えていないようになっているのではないか。
- ・ 風力発電の調査を仕事としてやっているが、地球温暖化対策の一つとして、最近また、注目され始めてきた。
- ・ 特に、9月の北海道胆振東部地震でブラックアウトが発生して、北海道全域が停電した。
- ・ このような時にこそ、再生可能エネルギーを使ってもらいたい。
- ・ 自分は、水道事業の技術者であるが、現在、水道分野では水道管の老朽化が進んでいる。
- ・ また、北海道の水資源、水源林が外国人に購入されているのが気になっている。
- ・ 先日の胆振東部地震の被災地になった安平町の地すべりが起きた森林の大半は、人工林で樹種としてはミズナラを植栽し、ドングリを増やす活動をやってきた。これが、地すべりの発生に起因したというようなことはないのだろうか。

【自然共生社会を構築するために私たちは何ができるか？に関する意見の概要】

- ・ 地域の歴史・文化を勉強することから、始めてはどうか。
- ・ 人と人とのつながりを大切にすることから、活動をしていきたい。
- ・ 自分と関係がありそうな人に、積極的にアプローチしていつてはどうか。
- ・ 山岳地帯の国立公園には、警察、山岳パトロール隊、民間ガイドなど、いろいろな人が関係している。
- ・ このような複雑な人間関係を円滑にしていくために、自分は調整役になるよう心がけている。
- ・ 例えば、市民と行政との橋渡し役、団体・個人などの緩衝役になれるよう努力している。
- ・ 高山植物の盗難が大きな問題となっており、絶滅の危機に瀕している種も多い。
- ・ 高山植物の盗難防止のネットワークがあるので、これを広報していきたい。
- ・ このネットワークでは、山岳道路の建設事業を廃止した例もある。
- ・ こうしたネットワークの形成がとても重要である。
- ・ 大雪山国立公園の規模は、2,200ha もあり広大である。
- ・ しかし、土地利用が単純で、権利関係も複雑でないので、本州よりも連携がしやすいかもしれない。
- ・ 小さな気づきを、見逃さないようにしていきたい。
- ・ そのためにも、環境カウンセラー同士の交流が大事だと思う。
- ・ 自分から、ネットワークを形成するように努力していきたい。
- ・ 地域で取り組んでいることを、地域の人が分かっていない場合が多い。
- ・ これを解消するためには、地域の人たちといっしょに何かをやっていくことが必要だと思う。
- ・ 北海道では、アライグマが増えてきていてこれを捕獲し、生息数を減らすことが難しい。
- ・ エゾシカ、キツネの生息数が増えてきて、数多く出没するようになってきた。
- ・ これらの実態を急激に阻止することは難しいが、地域の人にも協力してもらい、地域の人から目撃情報などを、主体的に情報発信してもらおうことが良いのではないか。

- ・ 情報発信について、一言、言わせてもらおうと、発信したい情報をホームページに掲載しただけではダメである。
- ・ 言葉で伝えていくことが最も大切なことである。チラシの作成と配布だけでもダメ。環境カウンセラーはアナログによる広報や活動が大事なのである。
- ・ 気づきという点では、昔の写真をデジタル化することが良いと思う。それを基にして、多様な人に気づきをさせることができるのではないかな。
- ・ 昔は学校の先生たちが、山登りや自然観察会に参加していたが、最近の先生方は休日出勤や残業を避ける風潮が出てきたため、こうした活動に参加しなくなっている。こうした先生方に対しては、環境カウンセラーが中心になって声かけを行い、例えば、1本釣りなどの形で、参加するようにしていくのが良いのではないかな。
- ・ 学校の先生方に対して、自然観察会などの研修会を企画し、実行してはどうか。自分の場合は、学校の先生に対して、自分からアポイントメントを取ったことがある。
- ・ 環境カウンセラーの人たちの考え方や活動状況は、今回のような研修会に参加してくれる人については分かるが、参加しない人についてはその実態が分からない。
- ・ こうした人たちとの連携・交流を、どのようにしていくのが大きな問題である。

[第2分科会会場の全体風景]



[第2分科会会場の全体風景]



[第2分科会会場の全体風景]



5. アンケート

1) アンケート用紙

①都道府県をご記入下さい。 _____ 都道府県

②登録部門を○で囲んで下さい。

市民部門

事業者部

両部門

③登録年度をご記入下さい。

西暦

_____年

④参加している環境カウンセラー協（議）会名をお知らせください。

_____協会

⑤今回を含めた受講回数をご記入下さい。

_____回目

⑥研修参加の目的として、もっとも主要な目的を以下事項より1つ選択して下さい。

A スキルアップ B 最新情報の収集 C 情報交換

D 更新要件の取得 E その他

⑦全体研修の評価について【】欄にご記入下さい。

○：大変参考になった。△：参考にできる点があった。×：よくわからなかった。

1. 「SDGsの視点を踏まえた持続可能な地域づくり」【 】

2. 「ESDの視点を取り入れたファシリテーション技術の向上について」【 】

⑧今回受講された専門研修の評価を○で囲んで下さい。

第1分科会「低炭素化社会の構築に向けて」

第2分科会「自然共生社会とは」

●受講した専門研修の評価を○で囲んで下さい。

5 4 3 2 1

●ワークショップの評価を○で囲んで下さい。

5 4 3 2 1

⑨次回に受講したい（若しくは期待する）専門研修の分野を○で囲んで下さい。

A地球温暖化対策 1 B ESD（SDGsを含む）の推進

C 循環型社会の形成 D 生物多様性の保全

E その他

2) アンケート集計結果

	都道府 県	登録部門	登録年 度	受講 回数	加入協 (議)会	参加 目的	研 修 A	研 修 B	専 門 研 修	評 価	W S 評 価	次回 受講 は	気づいた点
1	北海道	事業者	2001	10	北海道	A	○	○	1	5	5	B	新しい形式での研修会であったが、よい内容でした。
2	北海道	事業者	2012	5	北海道	C	○	○	1	4	4	C	
3	北海道	市民	2013	3		D	○	△	2	4	4	A	休憩時間が少ない。全体研修の講演は対話形式にしたほうがよい。従来の研修内容よりは充実していると思います。環境カウンセラーの認知度を高め環境カウンセラーが活躍する場を提供してもらいたい。情報発信のあり方を見直してほしい。ファシリテーターから分科会単位の発表は大変参考になりました。
4	北海道	両部門	2002	毎	北海道	A	△	○		5	5	A	SDGsの実施の困難さを改めて認識した。
5	北海道	事業者	1996	10	北海道	C	○	○	1	5	5	B	各分科会でも環境カウンセラー制度の認知度の低さが話題になった。自治体等に広く認知され、利活用が進むことを期待する。
6	北海道	市民	2017	1		D	△	×	1	4	4		
7	北海道	事業者	2010		北海道	C	○	○	2	4	4	E	環境カウンセラー同士の情報共有の活性化
8	北海道	事業者	2001	15	北海道	D	○	△	1	4	4	D	環境カウンセラーの参加人数が少ない。多数が参加する仕組みを作るべき。たとえば3年に1回研修に参加することを義務化する。
9	北海道	市民	2004	10	北海道	B	○	○	1			B	今後も一般参加者のコーナーも持ち続けて環境カウンセラー制度をPRし続ける必要があると気づきました。
10	北海道	事業者	2007	8	北海道	D	△	△	1	4	4	A	カウンセラーを続けるべきか要検討事項と認識した。

11	北海道	事業者	1996	13	北海道	C	○	○		4	4	A	環境カウンセラーの力強い発展を期待いたします。
12	北海道	市民	1996	3		C	△	△	2	4	4	D	
13	北海道	両部門	1998	10	北海道	B	○	○	1	4	4	C	
14	北海道	市民	2008	3	北海道	A	○	△	2	4	4	D	
15	北海道	市民	2001	14	北海道	B	○	○	2	5	4	B	
16	北海道	市民	2008	3	北海道	A	△	△	1	3	3	B	様々な専門知識をお持ちの方の意見が出され、聞いているだけで勉強になりました。カウンセラー同士の協働の機会が今後さらに増えてほしいと思いました。ありがとうございました。
17	北海道	両部門	2006	5	北海道	A	△	△	1	3	3	B	
18	北海道	事業者	1996	12	北海道	C	△	○		3	4	D	たいへんですが、この形式で継続できれば良いですね。

参加者 北海道 20名(アンケート回答者 18名)

事業者部門:8名 市民部門:7名 両部門:3名

北海道環境カウンセラー協会会員 15名

参加目的 Aスキルアップ:5名 B最新情報の収集:3名 C情報交換:6名

D更新要件の取得:4名 Eその他:0名

平均受講回数 : 6.69回

全体研修 研修1:○11、△7、×0 研修2:○11、△6、×1

専門研修 評価点合計:69 平均点:4.1

ワークショップ 評価点合計:69 平均点:4.1

参加者総数:20名 アンケート回収:18名 回収率:90.0%

次回の受講希望 A地球温暖化対策:4名 BESD(SDGsを含む)の推進:6名

C循環型社会の形成:2名 D生物多様性の保全:4名

Eその他:1名

3) 自由記載アンケート結果まとめ

- ・新しい形式での研修会であったが、よい内容でした。
- ・休憩時間が少ない。全体研修の講演は対話形式にしたほうがよい。従来の研修内容よりは充実していると思います。環境カウンセラーの認知度を高め環境カウンセラーが活躍する場を提供してもらいたい。情報発信のあり方を見直してほしい。ファシリテーターから分科会単位の発表は大変参考になりました。
- ・SDGsの実施の困難さを改めて認識した。
- ・各分科会でも環境カウンセラー制度の認知度の低さが話題になった。自治体等に広く認知され、利活用が進むことを期待する。
- ・環境カウンセラー同士の情報共有の活性化
- ・環境カウンセラーの参加人数が少ない。多数が参加する仕組みを作るべき。たとえば3年に1回研修に参加することを義務化する。
- ・今後も一般参加者のコーナーも持ち続けて環境カウンセラー制度をPRし続ける必要があると気づきました。
- ・カウンセラーを続けるべきか要検討事項と認識した。
- ・環境カウンセラーの力強い発展を期待いたします。
- ・様々な専門知識をお持ちの方の意見が出され、聞いているだけで勉強になりました。カウンセラー同士の協働の機会が今後さらに増えてほしいと思いました。ありがとうございました。
- ・たいへんですが、この形式で継続できれば良いですね。
- ・研修実施事務局の裏方であったため午前中の全体研修を中座することがあり、講師の貴重なお話を聞き洩らしたところがあったのが残念でした。

※北海道地区研修実施計画作成委員会及び研修実施事務局スタッフ

委員長 横山 武彦

委員 小林 正直

江本 匡

中田 光治

武田 義

当日スタッフ

伊藤 文泰

熊本 進誠

分科会ファシリテーター

伊藤 育子

小川 祐実